



者みんなど語り合う楽しい会となりました。街頭から長尾候補は、暮らしを守るために消費税の減税が必要であることや、

5日(木)、香川医療生協研修室にて、「日本原水爆被害者団体協議会」(日本被団協)の一員である「香川県原爆被害者の会」の総会が開催されました。当日は、4月27日に行われた「被爆体験から平和を考えるつどい」で語り部を務めた長尾昭雄さんも参加され、現状と到達点を確認するとともに、組織運営の新たな方向性と規約改正、及び当面の課題などについて意見交換を行いました。

被爆から80年となる今年、被爆者の方々の平均年齢は85歳を超えています。香川県でも、1980年代には8,900人の方が被爆者手帳を持っていました。現在では160人を割りこみ、香川県原爆被害者の会においても会員数の減少や高齢化が進んでいます。今回の総会の課題は、そのような状況の下で、「被爆者援護」と「核兵器廃絶」と言う二つの取り組みを如何に

「明治新聞雑誌文庫」の事務主任となる。関東大震災で膨大な史的資料が焼失したこと、国民文化の貴重な財産を残すため、外骨が提唱したものである。外骨は大きなリュックを背負って日本全国を回って資料収集の旅をはじめた。すでに61歳になっていたが、83歳で退職するまで仕事を続けた。

敗戦の翌年五月、外骨は「アメリカ様」というパンフレットを出版し、「日本軍閥の全滅、官僚の没落、財閥の屏息、ヤガテ民主的平和政府となる前提、誠に我々国民一同の大々の幸福」であると敗戦を歓迎した。

一九五五年七月、89歳で永眠。反権力を貫いた鑑とも言つべきジャーナリストであった。

一九二七年からは東大の「明治新聞雑誌文庫」の事務主任となる。関東大震災で膨大な史的資料が焼失したこと、国民文化の貴重な財産を残すため、外骨が提唱したものである。外骨は大きなリュックを背負って日本全国を回って資料収集の旅をはじめた。すでに61歳になっていたが、83歳で退職するまで仕事を続けた。

敗戦の翌年五月、外骨は「アメリカ様」というパンフレットを出版し、「日本軍閥の全滅、官僚の没落、財閥の屏息、ヤガテ民主的平和政府となる前提、誠に我々国民一同の大々の幸福」であると敗戦を歓迎した。

一九五五年七月、89歳で永眠。反権力を貫いた鑑とも言つべきジャーナリストであった。

(二)

## 参院香川選挙区 長尾まさき候補 丸亀から元気にスタート

長尾まさき参院香川選挙区候補は、連日県下各地で街頭宣伝やつどいにとりくんでいます。

6月4日には丸亀市で女性団体内後援会がひらいたつどいに参加しました。長尾候補は最初に、参加者へ

用紙を渡して、願いや質問を書いてもらい、それにこたえる形で対話が進みました。「コメが高くて困る。自民党はなぜこつなるまで放置していたのか」「なぜ立候補することになったのか」などにこたえていきま

した。参加者みんなど語り合う楽しい会となりました。街頭から長尾候補は、暮らしを守るために消費税の減税が必要であることや、



定価 月 100円  
発行所  
民主香川社  
高松市藤塚町  
3丁目13-14  
☎(087)834-7311

7日(土)・8日(日)に原水爆禁止四国大会が高松で開催されました。新婦人のコーラス小組えぶろんの歌声から始まり、香川県原水協代表の岩部乃之さんが、被爆80周年で被団協がノーベル平和賞を受賞した記念の年に学び合い、運動を前進させましようと呼びかけました。

各県からは、他団体との共闘や原爆パネル展、ビキ二船員訴訟のたたかい、自衛官の募集除外や原爆死亡者の合同慰霊祭の開催、「核禁条約への日本の参加意見書」の採択自治体を100%にする取り組み、世界大会への青年参加への働きかけなどが報告されました。

その後、日本原水協の若きホープ嶋田侑飛(ゆづひ)さんが「被爆80年2025世界大会の成功へ」という演題で記念講演。日本被団協がノーベル平和賞を受賞したことで国際規範「核のタブー」が形成されたが、保持するためには全世界の人が立ち上がる必要があることや、核

## 第71回原水爆禁止四国大会in香川

戦争で多くの死者が出るこのみならず、限定核戦争でも「核の冬」で食料生産の大幅な減少となり、飢餓が20億人にもおよびることなどから、核兵器は決して使用されてはならないこと。核兵器禁止条約の流れが強まっていることや、締約国会議で「核抑止力」論へ強い批判などの成果があがっていることなどを、具体的な採択内容や、各地での平和運動について話しました。

最後に7月の参議院選挙で非核平和の国民的選択とするために、草の根からの世論と運動を広げきり、その成果を8月の世界大会に持ち寄りましようと呼びかけました。

私は、「核兵器のない世界」はすべての人の希望であり、原爆や戦争のもたらす悲惨さをより多くの人に伝え、日本国憲法の理念を実現したいという思いを強くしました。

《新日本婦人の会 林》



## 讃岐の文学碑めぐり 小反骨のジャーナリスト 宮武外骨 (二八六七〜一九五五) 文・写真 深沢 雨根

宮武外骨は、阿野郡羽床村(現・綾川町)の生まれ。四男だったので亀四郎と命名された。宮武家は近郷に知られた大地主で、五百石の小作収入があつた。屋敷に近い綾川にかかる橋は、今でも「宮武橋」と呼ばれている。15歳で上京し、進文学舎橋香塾に学ぶ。この東京遊学時代に「朝野新聞」や「東京新報」を愛読し、ジャーナリストへの夢を抱くようになった。18歳の時、亀四郎という名を改め、外骨とした。亀は外骨内肉なので、外骨としたのである。

一八八七年、東京で「頓智協会雑誌」を発行して人氣を得る。一八八九年に明治憲法が公布された時、骸骨が頓智研法を下賜する挿絵を掲載したところ、これが不敬罪に問われ、外骨は

三年間入獄した。恐れをなした妻は、高松に帰ってしまった。

一九〇一年、大阪で「滑稽新聞」を発行して驚異的に売り上げを伸ばし、最高時には八万部を印刷した。権力者の横暴、腐敗を告発して庶民の喝采を受けたが、度重なる弾圧で一九〇九年十月をもって廃刊に追い込まれた。

一九一八年七月、米相場が大幅に上昇した。外骨は八月十日付け東京朝日新聞に、日比谷公園で米価高騰に反対する市民大会を開催する広告を出した。驚いた警察は集会を禁止したが、続々と市民がつめかけて大集会となった。すでに富山県などで米騒動が発生していたが、外骨は首都で大規模な市民大会の主権者になったのである。



一九二七年からは東大の「明治新聞雑誌文庫」の事務主任となる。関東大震災で膨大な史的資料が焼失したこと、国民文化の貴重な財産を残すため、外骨が提唱したものである。外骨は大きなリュックを背負って日本全国を回って資料収集の旅をはじめた。すでに61歳になっていたが、83歳で退職するまで仕事を続けた。

敗戦の翌年五月、外骨は「アメリカ様」というパンフレットを出版し、「日本軍閥の全滅、官僚の没落、財閥の屏息、ヤガテ民主的平和政府となる前提、誠に我々国民一同の大々の幸福」であると敗戦を歓迎した。

一九五五年七月、89歳で永眠。反権力を貫いた鑑とも言つべきジャーナリストであった。